

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01196

研究課題名(和文) シリア語キリスト教圏における宗教伝承と文字文化の関係の研究

研究課題名(英文) Studies on the relationship of religious tradition and literate culture in Syriac Christianity

研究代表者

戸田 聡 (TODA, Satoshi)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：20575906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、シリア語新約聖書の伝承に関する通説の批判的再検討(より具体的には新説の提唱)により、シリア語キリスト教圏における宗教伝承と文字文化の関係の再検討にまで議論を及ぼすことを狙いとした。見通しとして有したのは、古くから文字文化が存在すること自体は必ずしも宗教伝承の文字化を自動的にもたらさないのではないかという理解(別言すれば、パレスティナで見られたようなタルグムの伝統がシリア語キリスト教圏にも見られたのではないか、という理解)である。ただ、諸般の理由で、研究は最終目的地よりかなり手前で停滞し、現在なお継続中である。今後さらなる研究継続を通して、助成を受けたことへの責任を果たす所存である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在までのところ、本研究の成果は通説批判といった形でまだ論文化への途上段階の形式で存在するため、具体的な成果物を示すには残念ながら至れていない。とはいえ、本研究を進める中で今後の研究体制のあり方について深い反省ができたこと、及び、本研究遂行の過程で予算執行により種々の研究文献を購入できたことなどにより、従来我が国での研究蓄積が極めて乏しい本計画の研究分野においても、研究の継続に関して或る程度の見通しがついたことは大変幸いだった。助成を得たことによってこれらの進展が可能となったわけであり、科学研究費の助成には心から感謝を申し上げたい。今後さらに研究を進めて、社会への研究成果還元を図っていきたい。

研究成果の概要(英文)：The present research project aimed at a total reappraisal of the currently prevailing view on the tradition of the Syriac New Testament, and thereby intended to renew our view of the relationship between religious tradition and literate culture in Syriac Christianity. Its initial prospect was to show that the fact that the Syriac Christian Orient has of old a literate culture does not necessarily bring about automatically the cristalization of religious tradition into any book form. In other words, it seemed possible to observe that in the Syriac Christian Orient, as well as in the Jewish Palestine, a kind of 'targumization' of religious tradition could take place, so to speak. However, due to various reasons, the project reached a stage which is still far away from the conceived final objective. In order to fulfill the accountability for the grant given to the project, the project leader intends to continue the research in question and to open up a tangible new perspective.

研究分野：古代キリスト教史、東方キリスト教文学

キーワード：キリスト教 新約聖書 シリア語 ギリシア語

1. 研究開始当初の背景

本研究の「研究開始当初の背景」を述べると大略次のようになる。すなわち、宗教学で教典宗教という言葉が語られる際に、ふつう念頭に置かれるのはキリスト教だろう。つまり、ユダヤ教の一派として始まったキリスト教は、最初から旧約聖書を教典として有し、その後、福音書を始めとする諸文書を新約聖書として教典に追加して、旧新約聖書を合わせ持つ形で教典宗教として発展していったのだ、と。このような画像は、カトリック教会や、そこから派生・成立したプロテスタント教会など、言うなれば西方キリスト教の歴史からはごく自然に導かれ、かくてキリスト教は教典宗教の代表だと誰しも思いがちである。だが、このような画像、或いはキリスト教に関して通常自明とみなされているその他諸々の画像は、東方キリスト教の歴史に照らすと、必ずしも自明でないものと見えてくる可能性がある。非常に大きな視野から見るなら、本研究「シリア語キリスト教圏における宗教伝承と文字文化の関係の研究」が目指すのは、広い意味ではまさにこのような可能性を追求することだと言ってよい。なお、ここで言う「東方キリスト教」とは、既に古代のうちにカトリック教会（「西方キリスト教」）と袂を分かった教派、具体的にはシリア教会、コプト教会、アルメニア教会等々、中東を中心に存在する諸キリスト教を指す。

本研究自体は、研究代表者自身の研究関心に大きく由来している。すなわち、同人がここ数年来種々検討を進めてきた結果、シリア語キリスト教における宗教伝承に関して従来通説とされた学説の根拠の曖昧さが露呈しつつある。例えば通説では最初のシリア語訳福音書として、2世紀後半に活動したタティアノスという人物が編纂したディアテッサロン（4正典福音書を1つにまとめた、いわゆる調和福音書）が挙げられ、このことと、シリア語がディアテッサロンの著作（編纂）原語とされることは密接に関係しているが、研究代表者の論証によればディアテッサロンの著作（編纂）原語はほぼ間違いなくギリシア語であり、したがって通説は根本的な再検討を必要とする。また、新約聖書を構成する福音書以外の内容としては例えばパウロ書簡があり、これに関する通説は、パウロ書簡のシリア語訳が3世紀前半に存在したとする。この通説には重要な意味がある。というのも、3世紀中葉にメソポタミアで成立して東西に広く普及した古代末期の世界宗教マニ教を創唱したマニは、パウロ書簡の内容を知っていた可能性があるとしており、そしてマニが如何にしてそのような知識を得たかについて、通説は一応答えを提供していると解釈できなくもないからである。だが、シリア語訳パウロ書簡に関するこの通説も、研究代表者の考えでは根本的な再検討を必要とする。なぜなら、通説が言うシリア語訳パウロ書簡は無論キリスト教（あえて言えば正統的・主流派的なキリスト教）の中で成立しており、その通説がマニ教に関する上記の問いへの「答え」たりうるためには、マニが同時代の正統的・主流派的なキリスト教との間に何らかの接点を有したのでなければならぬが、そのような接点が存在したとは想像しにくいからである（マニはユダヤ的キリスト教的な異端たるエルカサイ派の中で生育したとされており、そして開教以後のマニ及び創始されたマニ教自体、同時代の正統的・主流派的なキリスト教側からは最初から異端とみなされた可能性が高い）。さらに研究代表者の検討によれば、4世紀の代表的なシリア語キリスト教著作作家たるエフライムの著作からは、彼が好んで使ったシリア語訳福音書の存在が浮かび上がってきておらず、このことは、支配的なシリア語訳福音書がエフライムの時代に存在しなかった可能性を強く示唆している。

以上の議論から示唆されるのは、実はシリア語キリスト教圏では、シリア語訳新約聖書は、少なくとも支配的に流布する形では、4世紀に至るまで存在しなかったのではないか、という理解である。但し、上記エフライムも、エフライムに先だつ別の4世紀シリア語キリスト教著作作家アフラハトも、新約聖書の内容は熟知している。そこで考えられるのは、イエス・キリスト及びそれ以降の時代のパレスティナのユダヤ教について研究者の間で語られる、いわゆるタルグム（聖典の口頭翻訳）の可能性である。つまりシリア語キリスト教著作家たちは、アフラハトであれエフライムであれ新約聖書にアクセスできたが、但しその新約聖書はギリシア語版の形で存在し、そして必要な際にそのつど口頭で翻訳されて、内容がシリア語キリスト教の信者たちに伝えられたのではないか（この点は、これら著作家たちのギリシア語知識の程度をどう見るかという問題にかかわるが、これに関する研究代表者の見方は極めて否定的である）。

つまりここで、これまで全く語られてこなかった、シリア語キリスト教におけるタルグムの可能性が浮上するのである。そこで本研究の目的は、まさにこの可能性、すなわち、古来文字を有した文化であるシリア語キリスト教圏が、それにもかかわらず宗教伝承を長らく自国語で書き記さずにいたという可能性、の当否を見極めることであり、既に記したように、この可能性は少なくとも管見の限りではこれまで指摘されたことが皆無であり、研究代表者自身のこれまでの研究から見て、充分検証に値すると考えた。

シリア語キリスト教におけるタルグムの可能性という、研究代表者が現在有する作業仮説は、従来の通説への挑戦であって、多方面からの検討・検証を必要とする。そのため、本研究では以下のように研究体制・役割分担を構成して遂行することとした。そのような検討の第1は、この作業仮説がシリア語訳新約聖書のその後の伝承史と整合的か否か、である。実は5世紀以

降については、シリア語訳新約聖書の伝承史は、多少の議論はあるが大筋ではほぼ明らかであり、まずいわゆる新約聖書ペシッタ（これがのちにシリア語キリスト教における支配的なシリア語訳新約聖書として流布した）が登場し、その後、ギリシア語からの逐語訳を目指した翻訳（フィロクセノス版及びバルケル版）が見られたことが知られている。そこで、その後のこのような歴史との整合性の如何、及び、後代に見られたそれら諸訳に痕跡を残す、より古いシリア語訳新約聖書の断片との関連如何といった問題を研究分担者が取り扱う。

必要な第2の検討はシリア語版旧約聖書の伝承にかかわる。シリア語キリスト教研究では、シリア語版旧約聖書とシリア語訳新約聖書の伝承は当初各々歩みが異なり、ようやくのちにペシッタ（すなわち旧約聖書ペシッタと新約聖書ペシッタが合わさったものとしての）という形で支配的に流布するようになった、ということが昔から知られている。但し、とはいえ旧約も新約も無論キリスト教の聖典であり、両者が全く無関係であるなどということはありません、そしてペシッタの支配的流布が本格化する5世紀より以前でも、上記アフラハトやエフライムなど初期のシリア語キリスト教文献において旧約聖書は大いに参照されてきた。そこで、本研究との関連では、シリア語版旧約聖書の伝承史のありようが本研究の作業仮説と整合的か否かが問題となる。この問題を研究分担者が取り扱う。

第3に、上述したマニ教について、マニ教とシリア語キリスト教の関係をどう考えるかという問題がある。つまり、古代末期の宣教的な世界宗教としてキリスト教と競合したマニ教は、3世紀中葉の成立当初から自前の聖典を有した「生まれながらの教典宗教」だと言えるが、マニ教のこの教典宗教志向は、同じ地域に存在したキリスト教であるシリア語キリスト教の同時代のありようとかかわっているのが当然問われてよい。この問題を研究分担者が取り扱う。

最後に第4としてアルメニア語キリスト教が挙げられる。キリスト教の一層の普及のために5世紀初頭に文字が発明されたアルメニアは、「東方キリスト教圏における宗教伝承と文字文化の関係」を考える際にはそもそも逸せないが、対象地域をシリア語キリスト教圏に限った本研究においてもアルメニア語キリスト教は重要な意義を有する。というのは、アルメニアにおけるキリスト教の聖典伝承は、ギリシア語からの翻訳による流入が多いとはいえ、最古層ではシリア語からの流入も見られた（但し、両者の割合・関連等々をどう理解するかは研究上議論がある）とされるからである。最初期のアルメニア語キリスト教へのシリア語聖典伝承の流入の如何という問題は、本研究の上記作業仮説の当否にも直接かわる可能性のある論点である。この論点を研究協力者が扱う。以上が本研究計画の研究体制だった。

既に如上から明らかなように、本研究は研究代表者の問題関心を中心に展開される研究であり、代表者自身が検討すべき論点は極めて多岐にわたる。以下列挙すると、

- ・シリア語訳パウロ書簡に関する通説の再検討
- ・アフラハトによる新約聖書利用に関する検討（先行研究による検討は極めて不十分）
- ・その他の最初期シリア語キリスト教文献における新約聖書利用に関する検討
- ・マニ教の創始者マニによる聖書利用に関する通説の批判的再検討
- ・（シリア語訳福音書伝承の再検討との関連で）『トマス行伝』の著作原語の再検討*

* 『トマス行伝』は聖書正典に属さない、いわゆる外典の1つである
等が挙げられる。ここでは各論点の具体的な研究方法は詳述不可能だが、最後に挙げた『トマス行伝』を例に記すと、通説によれば3世紀初頭にシリア語で著作されたとされる『トマス行伝』は、同行伝が含む古い福音書引用のゆえに、シリア語訳福音書伝承の研究との関係で決定的な重要性を有する。そこで、通説の再検討に必要なのは同行伝のシリア語版とギリシア語版の徹底的な比較であり、その際「翻訳の誤り」の発見が目指される。そしてもし、研究代表者が予想するようにシリア語でなくギリシア語が著作原語ならば、シリア語版『行伝』の成立年代、及びシリア語訳福音書の成立年代、が後代にずれ込むというわけである。現状では各論点の検討にどれほど時間を要するかは全く不明で、研究の第1年に何、第2年に何をするとといった形のスケジュールの提示は困難だが、代表者はすべての論点を研究期間内に検討し、代表者・分担者らが年来参加する「古代・東方キリスト教研究会」（同研究会については後述）で成果を発表し、分担者らによる批判を仰ぐ予定であり、各年度7月末（第2・3年）と1月末（第1・2・3年）の会合をそれに当てる。特に1月末の会合については、種々のメーリングリストで宣伝して公開性を高めることを目指す。それらを踏まえて研究期間内に、本研究の内容に関する論文の、国際的な学術雑誌への投稿・公刊を目指すこととした。

研究の波及効果は以上の記述の中に既に含まれていたと言えるが、改めてまとめて記すと、まず本研究は、キリスト教＝教典宗教という紋切り型のイメージに対する異議申し立てを提起しうる。ゆえに例えば、キリスト教の神学のあり方に対しても問題提起を為しうる。すなわち、キリスト教神学と言えば通常、スコラ学に代表されるような壮大な体系性を有する学的営みが意識されがちだが、そうでなく、聖典伝承など宗教伝承（しかも往々口伝の伝承）が当該キリスト教の神学的営みの中核的現場を成していた可能性が問題たりえよう。また、本研究は、中東の宗教では必ずしも文字伝承が重視されていなかったという可能性をも提起しうる。例えば、ユダヤ教におけるいわゆる口伝の律法と書かれた律法との関係についてのよう、宗教における口承伝承と文字伝承の関係に関する省察・見直しの契機を提供しうる。そしてさらに、仮に研究代表者の仮説の妥当性が論証されたなら、そのこと自体はもちろん、当該研究分野における画期的な研究成果となるであろうことが期待される。

以上が、本研究の「研究開始当初の背景」だった。

2. 研究の目的

1. に述べたところから明らかなように、古来文字を有した文化であるシリア語キリスト教圏が、それにもかかわらず宗教伝承を長らく自国語で書き記さずにいたという可能性、の当否を見極めることが、本研究の目的だった。

3. 研究の方法

研究分担者の協力に委ねる部分を除くなら、本研究が検討すべき論点は極めて多岐にわたり、例えば以下のような論点が挙げられる。

- ・シリア語訳パウロ書簡に関する通説の再検討
- ・アフラハトによる新約聖書利用に関する検討（先行研究による検討は極めて不十分）
- ・その他の最初期シリア語キリスト教文献における新約聖書利用に関する検討
- ・マニ教の創始者マニによる聖書利用に関する通説の批判的再検討
- ・(シリア語訳福音書伝承の再検討との関連で)『トマス行伝』の著作原語の再検討

4. 研究成果

本研究計画は研究代表者の研究作業の進捗度如何によるところが大きく、その意味では第1年度(2019年度)の前半は、8月に海外の2つの学会で発表を行なうなど、それなりの活動ができたと思われる。但し、第1年度後半に入る頃から、やや遅れが見られるようになった。まず、これは当初全く想定していなかったことだが、研究代表者が所属大学の職員組合の役員に選出され、実際問題としてその仕事の負担が非常に大きく、その分研究計画に費やすべき時間が食われることとなった。このような事態は無論研究活動とは本来全く無関係だが、とはいえどちらも一個の同じ人間が担う活動であるため、時間配分の点で影響が生じたことは否みがたい。次いで、2020年1月に入ってから、周知のコロナ禍の世界的蔓延によってすべてが狂ってきた。具体的に言えば、研究代表者の場合、3月にイギリス・ケンブリッジで行なわれるマニ教研究関連の研究集会に参加して本研究計画と深くかかわるテーマについて発表を行なうことを予定していたが、2月・3月と感染状況が日本及び欧米で深刻化する中、参加キャンセルを余儀なくされた(同研究集会自体は、もっぱらヨーロッパから参加者を集める形で実施された由)。また、分担者の中には調査のために海外渡航を予定していたが、コロナ禍のためにキャンセルを余儀なくされた結果、予算(この場合は旅費)の消化が不可能となるケースもあり、その分繰り越しをせざるをえなくなるということもあった。とはいえ、第1年度の研究計画自体は大幅に進捗が滞ったとまでは言えず、コロナ禍の影響の直撃を受けたのは、本研究計画の場合で言えば第2年度(2020年度)である。

すなわち、本研究計画にとって第2年度の最も重要な活動は国際シリア学会(2020年7月、於パリ)への参加だった。すなわち具体的には、同学会における研究発表、そしてそれに対する様々な指摘・批判を踏まえて、何らかの形で発表を論文化・公刊することが本研究計画の中核を成すはずだった。しかしながら、周知のコロナ禍の結果、同学会は2020年には開催されないこととなり、2年延期されて2022年夏(つまり本研究計画の終了以後)に実施予定ということになってしまった。これがまず、本研究計画にとっての大誤算である。

次いで、2020年度前半は全国の大学でオンライン授業が本格的に導入されることとなった学期だが、既に種々報道されているように、オンライン授業のための負担は従来の対面式の授業に比べて格段に重く、そのため2020年度前半は事実上研究を停止せざるをえない状況にあったと言ってよい(第1年度の報告書に書いた所属大学の職員組合の役員としての職務も、これに重なり、職務負担を倍加したと言ってよい)。2020年度後半は、研究代表者自身は所属大学でのサバティカル研修期間に入ることとなり、状況は大幅に改善されたが、それまでの遅れを取り戻すことは無論容易でない。

以上、研究計画実施の遅延に関する状況を述べたが、これらを踏まえて2020年度後半では、この間社会的にも普及しつつあるオンライン会議の形式により実施された日本聖書学研究所の例会に於いて、本計画に密接に関連する発表を行なった。また、ギリシア語学に関する国際学会(これもオンライン学会)にも参加し、発表を行なった。以上が第2年度の実績である。

かくて第2年度で大幅な遅れを記録することとなった本研究計画だが、残念ながら最終年度の第3年度についても遅れの挽回には至らなかった。これについて反省するに、今さらながら、そもそものアプローチに問題があったことを認めざるをえない。つまり本研究計画自体の内容については、通説批判(の姿勢)が昨今の科研費支援で重視されているという情報があり、そのことと研究代表者自身の問題関心がたまたま合致したことが本研究計画の実施を可能にした面があったが、その関心に対する問題意識が代表者自身と分担者との間で必ずしも共有されず、したがって、それぞれ独立した一家を成すそれら分担者に対して、自らの研究関心を曲げて本研究計画への専心的な関与を求めることは困難であり、実質的には研究代表者の独り相撲という面が強かったと言わざるをえない。

研究実績に関しては、研究会会合での発表などとしてはきたものの、それを論文の形でまとめて発表するには至っていない。具体的には、『トマス行伝』の著作原語をめぐる問題については2021年6月の古代・東方キリスト教研究会(<https://ancienteasternchristian.wordpress.com/>)第55回会合で口頭発表を行ない、本研究計画の立場と異なる諸々の通説的理解(シリア語著作

原語説)を批判したが、それに代わる説(ギリシア語著作原語説)を積極的に支持する証拠を発見するには至っていない。『行伝』という著作自体の長さも相俟って、量的にこの研究は、学位論文のための研究のように数年の集中的な研究を必要とすることが明白であり、現在も研究は継続中である。また、アフラハトの新約聖書参照をめぐる問題についても、論文作成を目ざして研究を手がけたが、研究の十分な進展を見るには至っておらず、当初予定していた2021年度中の論文執筆は断念を余儀なくされた。この点に関する研究も現在継続中である。

なお、研究が継続中であるにもかかわらず、なぜ現時点で研究終了としたかについて一言しておきたい。その主たる理由は、今の研究体制の継続にはメリットがないと考えられるということにある。つまり、(以下は分担者に対する批判として述べるつもりではないが)研究関心を必ずしも同じくしない分担者たちとの協働を続ける形で研究を続けてももはや意味がなく、むしろ代表者が単独で研究を続けても大差はなく、むしろ本研究に関する責任は挙げて代表者自身が負うべきだと考えた。よって、本研究計画の実施は予定どおり3か年で終了とすることが妥当だと考えた次第である。

具体的な研究成果は以下のとおりである。

〔図書〕(計1件)

戸田 聡『古代キリスト教研究論集』(北海道大学大学院文学研究院研究叢書 31)、北海道大学出版会、2021年

〔学会・研究会発表〕(計3件)

TODA Satoshi, Damascus in Ancient Christianity. Paper read at 18th International Conference on Patristic Studies, Oxford, U.K. 2019年8月

戸田 聡「ヘブル語原マタイ福音書及び『ヘブル人による福音書』をめぐる」日本聖書学研究所 2021年1月例会

戸田 聡「『トマス行伝』の成立をめぐる(著作原語等)」古代・東方キリスト教研究会第55回会合 2021年6月13日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 戸田 聡
2. 発表標題 「ヘブル語原マタイ福音書及び『ヘブル人による福音書』をめぐって」
3. 学会等名 日本聖書学研究所2021年1月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TODA Satoshi
2. 発表標題 Teaching (Western) classical languages in Japan
3. 学会等名 International Online Conference Teaching Classical Languages in the 21st Century
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木 健
2. 発表標題 ペルシア思想史を構想する
3. 学会等名 第9回京都フォーラム「世界哲学を構想する」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TODA Satoshi
2. 発表標題 Some General Observations on the So-Called Apocryphal (or Deuterocanonical) Books of the Greek Old Testament concerning their respective Date, Place of Origin and Language of Composition
3. 学会等名 XXIII Congress of The International Organization for the Study of the Old Testament (IOSOT) in conjunction with The International Organization for Septuagint and Cognate Studies (IOSCS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TODA Satoshi
2. 発表標題 Damascus in Ancient Christianity
3. 学会等名 18th International Conference on Patristic Studies
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 戸田 聡	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 iv, 303
3. 書名 古代キリスト教研究論集	

1. 著者名 青木 健	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 374
3. 書名 ペルシア帝国(講談社現代新書)	

1. 著者名 Hidemi Takahashi, "Representation of the Syriac Language in Jingjiao and Yelikewen Documents" (pp. 23-91)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brepols	5. 総ページ数 260
3. 書名 Samuel N.C. Lieu & Glen Thompson (eds.), The Church of the East in Central Asia and China (China and the Mediterranean 1)	

1. 著者名 戸田 聡 (分担執筆)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 267, xvii (戸田執筆は063-086ページ)
3. 書名 世界哲学史 2 世界哲学の成立と展開 (ちくま新書)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	高橋 英海 (Takahashi Hidemi) (20349228)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究 分担者	青木 健 (Aoki Takeshi) (50745362)	静岡文化芸術大学・文化・芸術研究センター・教授 (23804)	
研究 分担者	武藤 慎一 (Muto Shinichi) (90321455)	大東文化大学・文学部・教授 (32636)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------